

豊後高田市の文化財補遺編 「新指定の文化財」



【日本遺産】

○鬼が仏になった里「くにさき」

【国指定文化財】

○中山仙境（夷谷）

【県指定文化財】

○早田国東塔

○城山薬師堂四面石仏

鬼が仏になった里「くにさき」

■認定日：平成30年 5月24日 ■シリアル型（◎豊後高田市・国東市）



日本遺産は、地域に根ざした伝統文化・文化財にまつわるストーリーを認定し、観光振興・地域振興に役立てようという新制度。

豊後高田市・国東市では、修正鬼会に代表される鬼文化に関連する63の構成文化財を選定し、「くにさき」の鬼に祈る文化についてまとめたストーリーを制作し、平成30年に認定を受けた。認定ストーリーを活用した地域活性化のための事業を推進する。

【ストーリー概要】

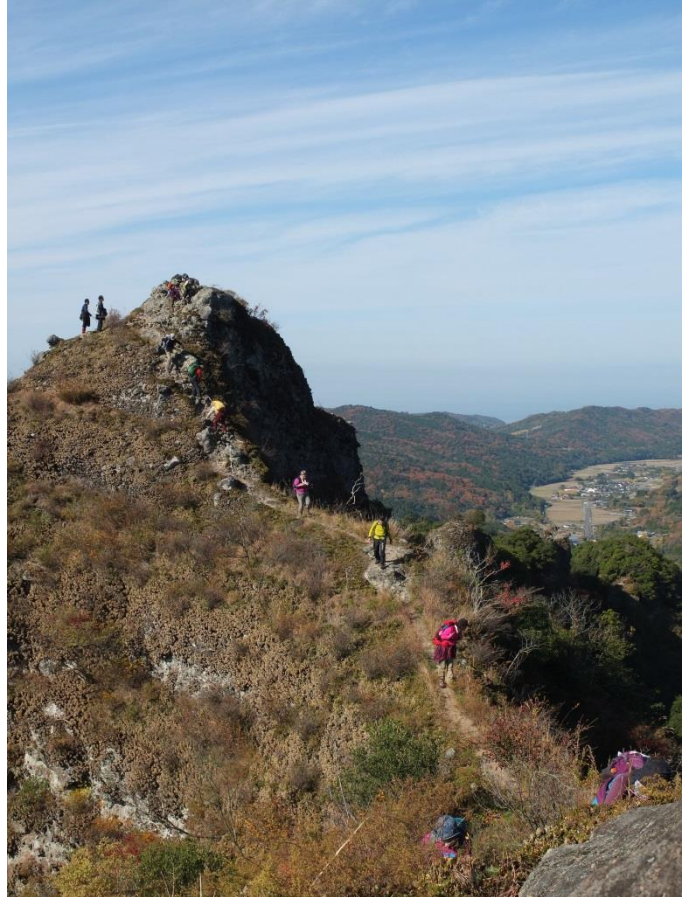
「くにさき」の寺には鬼がいる、一般に恐ろしいものの象徴である鬼だが、「くにさき」の鬼は人々に幸せを届けてくれる。修正鬼会の晩、共に笑い、踊り、酒を酌み交わす―。「くにさき」では、人々と鬼とが長年の友のように繋がれる。

【豊後高田市の構成文化財の例】

- 熊野磨崖仏（鬼が築いた石段を含む）
- 田染荘小崎の農村景観
- 天念寺（修正鬼会、川中不動、天念寺耶馬を含む）
- 長安寺（木造太郎天立像を含む）
- 無動寺（無動寺耶馬を含む）
- 六郷山夷岩屋の寺社境内（中山仙境（夷谷）を含む）

中山仙境（夷谷）

■名勝 ■指定日：平成30年10月15日 ■所在地：夷 ■年代：古代～近世



国東半島北西に位置する香々地の谷は、上流域において中山仙境によって分岐して東西2本の夷谷となる。夷谷は、中山仙境、東夷の北東側、西夷の西側に広がる広大な岩峰群に囲まれ、一帯は景勝地として知られている。

古代、夷谷には六郷山寺院の一つである夷石屋という寺院が成立し、鎌倉時代には弘と呼ばれる小規模の耕地が展開していたことが分かっているが、その開発に関する記載として、夷住僧行源解状案に登場する「本大魔所」が注目される。人々を寄せ付けない大魔所であった夷谷は、修行僧らによって、岩石や樹根を徐々に除かれ、夷全体を夷山として境内としていった。中世後期には夷石屋の活動範囲も広がり、中山仙境側に磨崖仏や坊跡が分布するようになる。霊仙寺・実相院などが寺院化するのも戦国時代頃と考えられている。

江戸時代には、江戸出身の国学者・高井八穂によって、夷谷八景（楽庭桜花・藤谷藤花・夷川螢火・高城秋月・大平峯雪・車橋夜雨・霊仙晚鐘・六所宮燈）が定められた。耶馬溪が天下に無しと称された翌年の文政2(1819)年には、夷谷が景勝地としての評価を得たことになる。

このように夷谷においては、地形上で地区を分断する中山仙境が、精神的な側面においては、かえって2本の谷を繋ぐ役割をしており、中山仙境は夷谷の風景観の淵源となっている。

早田国東塔

■有形 ■指定日：31年3月12日 ■所在地：香々地 ■年代：南北朝初期

香々地字早田の殿屋敷と呼ばれる一画に、元々散在していた部材を、昭和50年代の文化財調査で積み上げた国東塔。かなり大型で、周囲に同サイズの石像物はなく、各部材のかみ合わせもよく、一体のものであると評価される。

塔身には薬研彫りによる金剛四仏の梵字、暦応二（1339）年、大願主沙弥實道の名を記した銘が残されている。当時は南北朝時代のものとして評価が高まらなかったが、後の検討で香々地荘の荘官（公文）の家系とされる黒田家所有の系図（南北朝時代に成立）に、大願主の實道の名が見えることがわかった。当国東塔の造立経緯などを探る上で重要な史料であり、県指定における調査においては、塔の歴史性が高まったことが、特に評価された。



城山薬師堂四面石仏

■有形 ■指定日：31年3月12日 ■所在地：田染真木 ■年代：室町時代

田染真木字城山の山の中腹に位置する石仏。巨大な安山岩の岩瘤（高さ227cm、横幅258cm、奥行き197cm）の四面に10軀の仏像をほどこした石仏。室町時代にやや長い時間をかけて制作されたと考えられる。背面の石仏の方が彫りが深く、丁寧な作りをしており、前方に向かうごとに彫りが浅く、頭体のバランス等に差異がある。

現在は薬師堂という小堂の中にあるが、像の内訳を見ると、阿弥陀如来が5軀、薬師如来が2軀、不空罽索観音が1軀、尊名不詳2軀となっており、阿弥陀信仰に基づいて造像されたと評価された。

このように巨石の多面に仏像を彫り込んだ石仏は類がなく、国東半島の多様な石造文化の事例の1つであろう。

